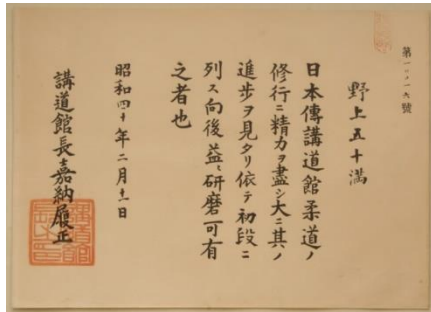


私の思い出 「欧州への憧れ」 昭和42年～ No.2/10

私は一旦こうと決めたらそれをやり通すことが大切だという事を「堀井 博先生」から教わりました。柔道の決着は審判によって判定が下されます。勝負の勝ち負けは、立ち技、寝技、関節技とありますが、私は寝技が得意としていた。寝技となると「抑えこみ」「絞め技」「関節技」とありますが私は絞め技や関節技を得意とし、その技で黒帯になり柔道で汗を流し水戸での大会に臨んだ。これは堀井先生の指導があったからこそ強くなれたと感謝している。



堀井先生が教えた事、勝負の判定は審判が下すもので決して審判が一本と宣告するまで手を抜いてはいけないという一言でした。審判員が決めるという言葉はその後の人生に大きく役立つ事となりました。

東京の空の下で自由に生きることを決めた自分は世界を見てみようという漠然とした夢をどのようにすれば実現させられるのか、資金を茨城の親や兄弟に頼んでもまず無理な話、自分自身で稼ぐことにした。スポーツ新聞で見つけた「M製本所」の運転手で手取り5万円、前の繊維問屋より高かった。社長さんに夜英語の学校に通うという条件で4月から「住み込み」で働く事が出来るようになり布団一式を製本所の2階の部屋に運び込んだ。違う部屋に一人同県人がいたが彼はすぐに辞めてしまい、私一人が部屋を占有出来た。農家育ち柔道で鍛えた精神力は本領を発揮し肉体労働は苦ではなかった。夜は千駄ヶ谷にある専門学校「津田スクールオブビジネス」通った。給料をもらえば直ぐに3万円を貯金する、残りの2万円で学費・交通費・食費にあてた。製本所の社長さんはそんな私を良くしてくれた。

飯田橋界限は大日本印刷があった。現在は世界最大規模の総合印刷会社であるが当時は小さな会社が沢山集まって出版印刷業界が成り立っていた。日本橋の堀留界限は繊維問屋が多く存在した。東京の街はそういう同業種が集まって街を形成し営業をされている。どんな地でも人情味が沢山あったから私みたいな人間が生きられたのだと思う。

そんな折、たまたま本屋で見つけた「Go abroad for study 海外へ留学し学ぼう」目の覚めるような本に出会う。その時私は世界の大学では入学は簡単で卒業が難しいという事を初めて知ったのです。フランスのパリ・ソルボンヌ大学へも日本の高校を卒業していれば誰でも入学は可能なのです。日本は入学試験が難しく、卒業は単位を取っていれば卒業論文でまず卒業できます。海外は入学だけなら高校卒業の資格があれば誰でもOKです、しかし卒業が難しいシステムなのです。私はデンマークにある International People's College という学校があることを知りその学校を留学先と決めたのです。何故ならば世界各地から生徒が集まってきているということで世界各地の友人と触れ合えるそして知識を深められると考えたのです。旅行会社は「日ソツーリストビューロー」ビザの申請も代行して頂き、旅費も支払い。有楽町にあった都庁でパスポートの申請を行った。当時は黄熱病の検疫 (yellow card) などもあった。ドルの交換比率が1ドル=360円という固定相場。国際免許を鮫洲の自動車教習所まで行き取得。田舎へも「あるいは」帰れないかもしれないと思い挨拶に行った。母校の堀井先生へも挨拶に行き旅立つ寄せ書きにも「道は振り返ってはならない！」と書いて頂いた決別を意味した。父親とは9歳 (小学3年) の時に別れ、母親一つで育てられた。故郷での最後の夜は感謝の気持ちや寂しさや世界への憧れが入り混じりいつもの母も慣れない土地で身体に気を付けるのだよと涙していた。

出発までの時間はどんどん過ぎて行行った。送別会も繊維会社の仲間達もしてくれた。また足立区亀有で開いた送別会では柔道部で一緒だったT君 (東京消防庁勤務) も駆け付けくれた。餞別に茶色い靴を、野上この靴を履いていけ。

だから絶対帰って来いよと励ましてくれた。青い目の嫁さんを連れて帰って来いよとも(笑)

1969年6月24日横浜からロシアの船で出発することになったのです。船の名前はハバロフスク号。



横浜港大棧橋は大勢の人でごった返しになっていた。兄や姉も駆け付けてくれた。友達も見送りに来てくれた。テープが飛んできて蛍の光のブラスバンド音楽が流れ兄のテープが手も元に届いた。ああ自分は日本を出発し遠い世界に旅立って行くのだということを実感する。自然と涙が流れてきた。つい昨日まで製本所の運転手だった自分がどうなってしまうのか……。目的があればこそハードな肉体労働にも耐えられた。学校にも通えた。誰が何と言おうと世界を自分の目で見てみようという信念があったればこそ旅達なのだ。当然の帰結である。乗船している日本人の多く大学生が多かった。自分みたいな学生でも無く、社会人でもない存在は少ない。その意味で悲壯感を抱いての船出なのだろう、この先は神のみぞ知る。ただ私は密かに思っていたことがある、それは私が作家でありたいと望んだ、テーマであり毎日綴った日記が私の根底にある第三者のエビデンスでもある。この目でこの足で世界を見る事が自分に課したミッションであり記録として残せた事が一番の宝物ある。

中央の写真は国学院大生のS君(同年輩)です。彼は都会の風で、夜通し人生論とか恋愛などを語り合った友人です。学生が抱いていた様々な事「安保反対とか国会前でのデモなどで亡くられた方もいた」そういう社会背景は生きて行く事が最大使命であった者達にとっては何となく疎遠であった。自分はそのポジションでは無いタイプであった。新聞・テレビは不要の世界でヨーロッパの地をさまよい歩く自分の姿を思い描くだけだった。

今でも IPC という学校は懐かしい思い出が残っている。そこでの授業 Film (映像) と出会い大きく刺激を受けたのであるがそのお話しは次回にいたしたいと思います。上記にIPCのリンクをはりましたのでもし興味がありましたらクリックで学校の様子を知ることができます。



コペンハーゲン・ポリスオフィス発行の在住票 1970.5.27

つづく To be continued・野上五十満 (無断転載禁止)